

「スポーツと地域活性化の 新たな可能性について」

スポーツジャーナリスト、株式会社スポーツコミュニケーションズ 代表取締役 **二宮 清純**

栗山英樹の「大局観」、 森保一の「見積もる力」

WBCで日本が優勝を果たし、非常に評価を上げた栗山監督と話しをして印象に残った言葉「大局観」を、まずご紹介します。

栗山監督の師匠は、西鉄の3連覇、1960年の大洋優勝を遂げた三原脩監督で、その弟子が中西太さんと仰木彬さんです。中西太さんと栗山監督は、ヤクルト時代のバッティングコーチと選手の間柄です。中西さんが預かっていた、三原さんが書いた虎の巻、「三原メモ」を栗山監督は見せてもらったそうです。そこにはリーダーにとって1番大事な大局観だと書いてあり、WBCでは、「とにかく大局観をずっと考えながら采配したのがよかった」と栗山監督は言っています。

三原さんは、当時の西鉄の強打者豊田泰光さんを2番に起用して「目標は打倒巨人のような小さいことじゃない。打倒メジャーリーグだ」と言いました。それは、まさに大局観でした。

仰木彬監督はその三原さんの大局観を受け継いだ方です。野茂のトルネード投法もイチローの振り子打法も、周りはみんな「やめろ」と言いましたが、仰木さんはそのオンリーワンの技術を認めました。才能を認めないと、人は育ちません。

「オンリーワン・イコール・ナンバーワン」とはよく言ったもので、強いオンリーワンはナンバーワンへの近道です。栗山監督が認めた大谷翔平の

二刀流もオンリーワンだと思います。

三原脩、中西太、仰木彬、栗山英樹とつながるラインで、先見性と大局観のある気宇壮大なリーダーが人材を輩出してくれた。それを今回のWBCは教えてくれました。

サッカー日本代表は、2022年のワールドカップカタール大会において、7大会連続出場で4回目の決勝トーナメントに進出し、ドイツ、スペインというワールドカップ優勝経験国に初勝利をした、1番価値があった大会でした。

森保一監督を私は「サッカー界の豊臣秀吉」と呼んでいます。長崎の無名高校の選手から代表監督に上り詰めた、今太閤みたいな出世物語です。

彼は実業団から誘いがなかったため、入団テストを受けてマツダに入りますが、高校生ながらに「僕を採用してください」と言っただけ、当時のGMが「面白い。うちにはそんなやつが必要だ」と言って、不採用予定だったのが入団となったという話があります。

当初はサンフレッチェ広島でも無名でしたが、当時の日本代表のハンス・オフト監督に見い出されて代表に抜擢されます。私がオフト氏に「なぜ彼を日本代表に選んだのですか」と聞いた時、こう返事していたのをいまだに覚えています。

「エスティメーション (estimation) があった」。

見積もる力、ゲームを読む力、予測する力が秀でている。状況に応じてプレーを使い分けられるのが他の選手と違ったというのです。黒

二宮 清純 (にのみや せいじゆん)

略歴

1960年愛媛県生まれ。スポーツ紙や流通紙の記者を経てフリーのスポーツジャーナリストとして独立。五輪・パラリンピック、サッカーW杯、ラグビーW杯など国内外で幅広い取材活動を展開。明治大学大学院博士前期課程修了。広島大学特別招聘教授。大正大学地域構想研究所客員教授。経済産業省「地域×スポーツクラブ産業研究会」委員。認定NPO法人健康都市活動支援機構理事。



子でもチームで1番大事な仕事をしている。ゲームを見積もってゲームをつかさどる役割が森保に任せられたといいます。残念ながらワールドカップには行けませんでした。後にサンフレッチェの監督に就任し、予算規模がJリーグ内で多い方ではないチームでも、J1で3回も優勝して、日本代表監督に就任しました。一つひとつ積み重ねて天下を取ってしまいました。それは人生の将来まで予測した彼のエスティメーションだと思います。

地域密着を目指す川淵三郎氏のリーダーシップ

私が、日本のスポーツ界で1番尊敬する人物は川淵三郎さんです。スポーツによる地域振興に1番貢献された方です。スポーツ界は川淵さんの出現前と出現後で、風景ががらっと変わりました。

この方くらいワンマン、専制君主、暴君、独裁者とメディアからバッシングされた方はいないのではないかと思います。怖い顔をした川淵さんの顔の上に「独裁者川淵、さっさとやめろ」と書いた中吊り広告もありました。でも当たっています(笑)。あれぐらい蛮勇と紙一重のリーダーシップをふるわなければ、日本のサッカーは永遠の低空飛行だったことでしょう。

80年代、日本代表の試合は平均観客動員数が300人から500人で、民間の会社なら間違いなく倒産です。まだ若かった私は「誰がリーダーでもこの組織は無理。もうつぶれる」と思っていました。

それは若気の至りです。リーダーが変わったら、組織は変わるのです。

サッカーのプロ化は日本初の地域密着型のスポーツクラブ構想です。きっかけは1985年、ワールドカップ・メキシコ大会の最終予選を韓国と戦った試合で、国立競技場の日本代表戦が初めて満員になりました。でも勝てませんでした。この頃は韓国にほとんど勝っていません。日本はまだアマチュアでしたが、韓国は一足先にKリーグでプロ化し、待遇も栄養面もトレーニングも偵察部隊もすでにプロ仕様。日本もプロ化しないといけない、と機運が盛り上がり、1991年に川淵さんがJリーグの初代チェアマンになり、1992年にカップ戦が始まりました。

Jリーグの理念は、こうでした。

「プロ野球は企業密着だがサッカーは地域密着でいく。ヨーロッパは全て都市中心で、メジャーリーグも都市が中心。それが地域を活性化しお客さん呼び込んだ。日本もそうしないといけない」。

川淵さんは地域密着の「Jリーグ百年構想」を打ち出し、100年かかっても自分たちは変わり続けるというメッセージを込めました。「スポーツで幸せな国へ」という初の目的規定宣言も行いましたが、私はこれ以上のキャッチフレーズはないと思います。「スポーツで人を幸せにする」「この国をスポーツで幸せにする」という川淵さんの思いが込められていました。

しかし、新しいことをやろうとすると必ず反対

勢力、抵抗勢力が出現します。90年代の頭、サッカー協会のある幹部は、こう言いました。

「サッカーのプロ化？バカも休み休み言え。バブルもはじけ、どこの企業がサッカーに金を出すとっているんだ。時期尚早だ、早過ぎる」。

もう一人の幹部は、こう言いました。

「日本にはプロ野球がある。サッカーのプロ化で成功した例があるか？前例がないことをやって失敗したら、いったい誰が責任を取るんだ」。

私は「時期尚早」「前例がない」の2つの言葉を耳にした瞬間、「ああ、これでプロ化は難しくなった」と思いました。

その時、いきなり立ち上がったのが川淵さんでした。

「時期尚早と言う人間は100年たっても時期尚早と言う。前例がないと言う人間は200年たっても前例がないと言う」。

もう、勝負ありです。ああ、リーダーとは最後の土壇場になったら覚悟と決意しかない。そう思いました。

「スポーツから地域のインフラも変わっていく」

もしJリーグが誕生していなかったら、日本代表が強くなることはありませんでした。以前は出場ゼロだったのに、プロ化後はワールドカップ7大会連続出場です。こんなに強くならなかつたら2002年のワールドカップ誘致の成功もありませんでした。

日本はスポーツ施設が非常に貧弱でしたが、電通総研の調べではワールドカップの経済効果は3兆5000億円で、全国に立派なスタジアムができました。天然芝のグラウンドが増えたのも、旗振り役は川淵さんでした。2002年ワールドカップで日本のグラウンドが「なぜ土なんだ」「なぜ天然芝じゃないんだ」と話題になった。天然芝でないとサッカーは面白くない。スポーツクラブを増やすにはまず天然芝のグラウンドありきだと推進した

川淵さんの役割は本当に大きかった。日本のスポーツ環境は、ずいぶん変わりました。

スポーツ庁は15兆円をかけてインフラを建設・拡張しようとしています。最初にビジネスありき。地域振興のためにスポーツが利用される。それは悪いことではありませんが、もっと大きな要素があります。減災、防災のための避難所も、欧米ではスタジアムやアリーナを利用しているのです。

2019年、ラグビーのワールドカップで日本が初めてベスト8を決めた試合は、横浜の日産スタジアムで行われましたが、台風19号が来て試合は中止になるのではないかと言われながら、奇跡的にできました。その日、近くの鶴見川が氾濫しましたが、スタジアムは高床式で遊水地機能があり、あふれた水がそこに流れ込むようになっていました。そのおかげで地域一帯は被害を免れました。

避難所の役割もあります。通常、避難所となる体育館は硬い床で、そこで寝起きするのを見ると気の毒で、大変だろうと思います。実際、災害で直接亡くなるのではなく、避難所生活などで体調をこわす災害関連死の比率では、日本は世界でも上位です。

それを考えると、私は今後、スタジアムやアリーナをつくる時、スポーツの試合やコンサートを開催するだけでなく、減災・防災の施設としての利用も訴えかけることで、理解を得られるのではないかと。個人的な意見として、そう思っています。

「娯楽がないと若者は故郷の町を捨てていくのか？」

日本は高度成長期、心のインフラづくりを怠ったのではないかと思います。

このまちに生まれてよかった、育ってよかったという「心の財産」をつくる。ヨーロッパはどんな小さなまちにもオーケストラ、スポーツクラブ、教会の3つは必ずあり、生きるための心のインフラです。私はJリーグ百年構想に賛同して、いろいろなことを学びました。

「ライフライン」というと日本ではこれまで電気、ガス、水道、道路などのハード面が多かった。もちろんそれはきわめて大事ですが、ソフト面のライフラインも考えなければいけない。ヨーロッパでは図書館、アリーナ、スタジアム、博物館、美術館なども全てライフラインです。日本はそんなソフト面のライフラインが弱すぎて、このままでは東京一極集中になってしまう。では地方はどうすべきかという問題からスタートしたわけです。

私がなぜ、Jリーグ百年構想運動に参画したかという、地方出身者だからだと思います。東京生まれの東京育ちだったら恐らく、やっていないと思います。私が生まれた、四国の愛媛県八幡浜市という港町はトロール漁船の本拠地で、子供の頃は本当に活気がありました。みかんも日本一の生産地で、皇室への献上品にもなっています。

夏祭りや夜市の時は、商店街は人でいっぱい、松山の人に「八幡浜はにぎやかで人がおるね」と言われたものです。でも残念ながら、それは過去です。今は人が歩いていない。商店街はシャッター街で、動く人影があると思ったら、猫だったりします。八幡浜市だけでなく、九州も中国も東北も北海道も、過疎化、少子化、高齢化のトリプルパンチを受けている市町村はたくさんあります。

若者がまちを離れる理由の1番目は進学、就職です。これは予想通りで何も驚きませんが、2番目の理由「まちに娯楽がない」というアンケート結果がものすごくショックでした。「そうか、やっぱり娯楽なんだ。娯楽がないとまちは廢れるんだ」と思いました。

私の力では大学や企業の誘致はできませんが、スポーツクラブをつくり、地域密着でコラボすることなら、アメリカやヨーロッパでの取材での知見を生かしてお役に立てるのではないかと思い、Jリーグ百年構想運動に賛同したわけです。

「パッション、ミッション、アクション、ビジョン」

私は川淵三郎さんから「スリー・プラス・ワン(3+1)」を学びました。以前はパッション、ミッション、アクションをリーダーの条件だと言っていました。最近、ビジョンを加えました。

パッションは情熱。川淵さんはやはり情熱があった。ミッションは使命感、理念で、それに基づく計画性です。

スポーツが変われば地域が変わる。地域が変われば中央も変わる。政府は「中央から地方へ」と言いますが、財源や税源、権限を委譲すれはうまくいくような単純な話ではありません。

おカネは大事ですが、それだけでは地域は栄えない。「このまちで子供を生みたい」「このまちで育つと楽しい」「このまちにみんなで住みたい」となるには、ソフトが必要です。それをつくらないといけません。川淵さんはそれをやると言いました。それが3番目のアクションで、行動力です。

「人はパンのみにて生きるにあらず」と言いますが、まさにその通り。生きるだけなら、ハードのインフラを整えば人間は生きていけます。ガスや水道のインフラを整えば、生存はできます。しかし、「いい生活をしたい」「生まれた以上は楽しみたい」「自分の子供にも誇りを持ってこのまちに住んでもらいたい」のなら、そのための“心のインフラ”を整えなければいけません。

川淵さんは30年以上前からこう言っていました。

「スポーツ、音楽、芸術などソフトの充実がないと、このまちで子供を生みたい、一緒に住みたいとまらない。早急にやらないと一極集中が加速する」。

残念ながら今はそれに拍車がかかっている、と私は思います。

スポーツで人口を増やす効果があるのかと言えば、はっきり言ってそこまでの力はありません。しかし人口流出を抑止する効果はあります。それはもう証明されています。

新潟アルビレックスというサッカークラブがあります。アルビレックスができる前、私はシンポジウムに呼ばれJリーグの意義を説明しました。

「二宮さん、ここでは無理です。新潟は寒く、雪が降る、冬には試合に誰も行きません。しかもスポーツは盛んでなく、有名な人はジャイアント馬場さんしかいません。大きな企業もありません。支援する企業がないのに、どうやってやるんですか」。

しかし、やってみたら、新潟に立派なクラブができました。サッカーファンも増えました。

要するに、やる気があるかないかです。川淵さんが言うように「できない理由ばかり口にするな」ということです。

「 ジャパンマネーが欧米のスポーツの改革を促した 」

スポーツビジネスにおいて、世界で1番、年間営業収入が多いのはアメリカンフットボールのNFL。2番目は野球のメジャーリーグで、3番目はバスケットボールのNBA。4番目はアイスホッケーのNHLです。これらはアメリカ4大スポーツです。

ヨーロッパのサッカーは、1番はイングランドのプレミアリーグ、2番目がスペインのリーガ・エスパニョーラ、3番目がドイツのブンデスリーガでイタリアのセリエA、フランスのリーグ・アンと続きます。日本プロ野球機構のNPBはその下で、それより下がJリーグです。

日本はGDPで中国に抜かれたといってもドイツより大きい世界第3位の経済大国ですから、スポーツビジネスのこの状況は物足りない。日本と世界のスポーツ市場規模の差を見ると、もっと顕著で、失われた30年の縮図です。メジャーリーグの市場規模が1兆3,000億円から1兆4,000億円の今は、日本のプロ野球とさらに差がついています。

ボブ・ホーナーという現役メジャーリーガーが1987年、ヤクルトスワローズに移籍しました。アトランタ・ブレーブスでFAになり、年俵が高すぎてヤンキースもレッドソックスも諦めたのに、ヤ

クルトが3億円で獲得に成功しました。

その時代、日本の球団はメジャー以上の資金力があつたのです。ホーナーを持っていかれたメジャーリーグは「冗談じゃない。ベースボールはアメリカの文化だ。なんで新興国の日本に持っていかれなきゃいけないんだ」と、いろいろな改革を始めました。

球団を拡張する。そうなる選手が足りなくなり日本、韓国、カリブ諸国、ドミニカ共和国、亡命キューバ人などから選手を求め、市場規模をどんどん拡大しました。一方、日本は縮小均衡です。それが大きな差として、はっきり表れました。

何もないゼロから始めたサッカーは大健闘と言えるかもしれません。Jリーグができた1993年、ジーコ、リトバルスキー、リネカーのような世界のビッグネームが来て、1994年のワールドカップ・アメリカ大会の後には、優勝国のブラジルからダウンガ、その前にもジョルジーニョ、レオナルドなどの優勝メンバーが日本にやってきました。

ヨーロッパも改革を始めました。プレミアリーグはスタジアムを大きくし、飲食、物販など観戦環境を整え、テレビの放映権料収入を増やし、スポンサー収入を増やしました。一方でJリーグは引き離されるばかりで、これも残念です。

スポーツに限らずあらゆる経済指標も同様で、30年間、何をしていたんだろうと思います。

「 「スポーツの力」で地域に浮揚効果が生まれる 」

私は若い人たちに講義もしていますが、学生は2000年前後生まれの「ミレニウム世代」です。ボブ・ホーナーやJリーグの初期の話をする、驚きます。

「昔の日本はすごかったんですね」。

大谷選手を見る彼らにとって、日本のプロ野球は、メジャーリーグに行くために入るところで、サッカーの海外クラブで活躍する日本代表選手を見る彼らにとって、Jリーグはヨーロッパに行く

ために入るところ。海外で稼ぐための腰かけの場だと思われています。

日本のいい時代を知らないのです。「Jリーグは地域振興のためにつくった」と言う、「ヨーロッパに行く選手を養成するためにできたと思っていた」と言う。そんな認識です。それは、改革に後ろ向きで、引き離された私たち大人にも責任があるでしょう。

メジャーリーグは現在30球団ですが、昔は、寒冷地出身の選手は少なかった。

日本のプロ野球も、昔は、選手の出身地はほとんどが四国、中国、九州、近畿、東海、南関東で、北海道や東北出身はほとんどいませんでしたが、今やメジャーリーグで活躍する大谷翔平や菊池雄星、プロ野球を代表する佐々木朗希も、みんな岩手県出身です。アメリカも1977年までの20年間で10球団を26球団に増やし、さらに90年代に30球団にしたことで、全米からメジャーリーガーが誕生するようになりました。

メジャーリーグ全体の売上げも、90年代初頭1,693億円だったのが2010年には7,364億円になり、2022年には1兆4,500億円と右肩上がりです。日本は90年代初頭が1,200億円で2022年には1,800億円と、微増です。

球団が潤うと選手の平均年俵も上がり、1990年代初頭、メジャーリーガーは100万ドル、約1億4,000万円でしたが、2010年は2億9,000万円、2022年は5億7,500万へ増えました。これだけ差がつくと、私が選手なら、お金を稼げるアメリカに行きます。これが球団数増加の収入効果です。しかし、日本は12球団体制がずっと続いています。

ずいぶん前、私は自民党政務調査会で「16球団構想」を唱え、新設候補地として北信越、静岡、四国を挙げ、それ以外に南九州・沖縄あたりで4球団増やしたらどうかと提案しました。そうすればセ・リーグ東・西地区、パ・リーグ東・西地区の各4球団のリーグ戦の後、それぞれでプレーオフができますと訴えました。

プロ野球は放映権も高く、1番儲かる。アメリカ型にしませんかと言うと、一部から「人口が減るところに球団をつくってもムダだ」と言われました。いや、それは逆です。ソフトがないから人口が減っていくのです。

サッカーのJリーグは関東から広島までの10クラブで発足しましたが、2023年現在はJ1が18、J2が22、J3が20の60クラブです。試合開催日にはサポーターが数千人、数万人単位で遠征移動します。スポーツには地域住民がつながる効果があり、話題になる。「どこが勝った、負けた」がコミュニケーションのツールになります。

スポーツには精神浮揚効果もあります。WBCで優勝したら気分がいい、大谷がホームランを打ったら今日はいいことがありそうだ、と思うように、数値化できない精神浮揚効果があります。

カンザスシティ・ロイヤルズという、人口40～50万人の地方都市の球団が、ニューヨーク・メッツに勝ってワールドチャンピオンになった時は、翌日がすごかった。「われわれはニューヨークを倒した」「とうとうニューヨークに勝った」と、カンザスシティ全体がお祭り騒ぎでした。野球で勝っただけなのですが、まちにもものすごい高揚感がありました。スポーツの良さはまちに誇りが持てることです。ここに住んでいる自分たちの代表が大都会のチームを倒して、「自分たちもできるんじゃないか」と誇りを持てるのです。

サッカーの天皇杯で、J3より下のリーグの高知ユナイテッドSCが、J1クラブに連勝する「ジャイアント・キリング」を起こしました。そうすると高知の人たちは盛り上がり、スタジアムにも観客が入るようになりました。去年の天皇杯で優勝した山梨県のヴァンフォーレ甲府もそうです。スポーツではそんなことが起こり得るのです。

「スポーツの力」には精神浮揚効果があります。それが経済効果をもたらします。皆様も、この「スポーツの力」をもっと活用していただきたいと思っています。